

メガロドン石灰岩(諸塚村産)

メガロドンは、大きな歯(蝶番上にある噛み合わせのための突起)と厚い殻を持つ二枚貝(厚歯二枚貝)で、中生代三畳紀後期(約2億1千万年～2億3千万年前)にテチス海域(古生代後期に出現した北のローラシア大陸と南のゴンドワナ大陸とを隔てる東西方向に伸びた海)で非常に繁栄しました。これまでの研究によって、熱帯地域の火山島に発達した浅いラグーン(石灰泥中に生息していたことが判明しています)のメガロドン石灰岩は、プレートの動きによって長距離移動し、日本列島に付加^{※1}したのです。



三畳紀後期の大陸分布

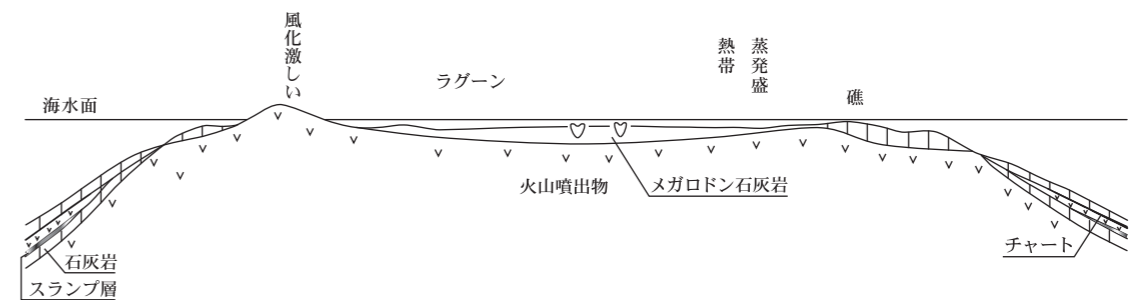
日本でのメガロドン化石の発見は、1981年に熊本県球泉洞近くの球磨川沿いで見つかったのが最初で、以降熊本県内の各地や大分・四国・関東・北海道など、付加体^{※2}中の三畳紀後期の石灰岩から確認されています。この時期の石灰岩は、仏像構造線の北側に沿った帯状の地域(三宝山帯)に多く見られることから、宮崎県内でも仏像構造線の北側の地域でメガロドン化石の存在の可能性が考えられていました。県内では1996年の文献で椎葉村からの産出が記述されたのが最初の発見です。その後2001年に高千穂町向山で発見されたのに続き、2005年には日之影町見立で、マグマの熱による熱変成を受け化石ごと大理石化した状態のものが確認される

※1, 2 陸側のプレートの下に海洋プレートが沈み込む際に、海溝などにたまった、陸起源の堆積物やプレートで運ばれてきた堆積物などが、陸側に押しつけられることを付加体^{※1}といい、付加された地質体のことを付加体^{※2}といいます。

など、発見が相次ぎました。さらに2007年には宮崎県総合博物館などが諸塚村内で行った調査により、黒岳付近でメガロドン化石が発見され、県内でのメガロドン産地は4カ所となりました。

この標本は、2007年に黒岳付近で発見されたものを、諸塚村が2008年5月に収集したものです。色の濃い泥質石灰岩の母岩の表面に、白いメガロドン化石が密集している様子や、貝殻の断面がよく表れています。左右の殻が離れたものが多い中で、両殻がそろった個体が見られるのは、ラグーン内の穏やかな海域で、貝殻が積み重なった状況の中で生息していたからだと推測できます。諸塚村内の地層には日本列島形成の歴史が刻まれているのです。

[宮崎県総合博物館]

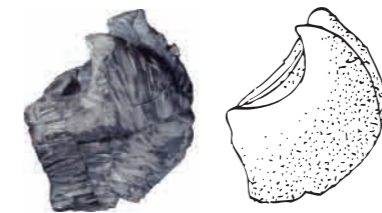


メガロドン石灰岩の堆積当時の環境 (資料提供: 田村 実 熊本大学名誉教授)



田村(1994)に加筆

九州のメガロドン産地



削り出されたメガロドン(左)と復元図(右)
Triadomegalodon sp. cf. tofanæ

(資料提供: 田村実熊本大学名誉教授)



ハンガリー産メガロドン類

(熊本大学教育学部所蔵)